

大規模災害時のくらしの回復に備えよう！

市古太郎 (東京都立大学, 災害協働サポート東京)

1. 話題提供の趣旨

- (1) 2024 年能登半島地震：被害と地域特性／地域のリーダーシップ／復興に関する仮説
- (2) 自然災害からの「くらしの回復」に備えるとは？
- (3) 地域として「くらしの回復」に備える事例：都立大都市防災研究室のアクションリサーチから

2. 2024 年能登半島地震：被害特性／地域のリーダーシップ／復興に関する仮説

(1) 被害と地域特性

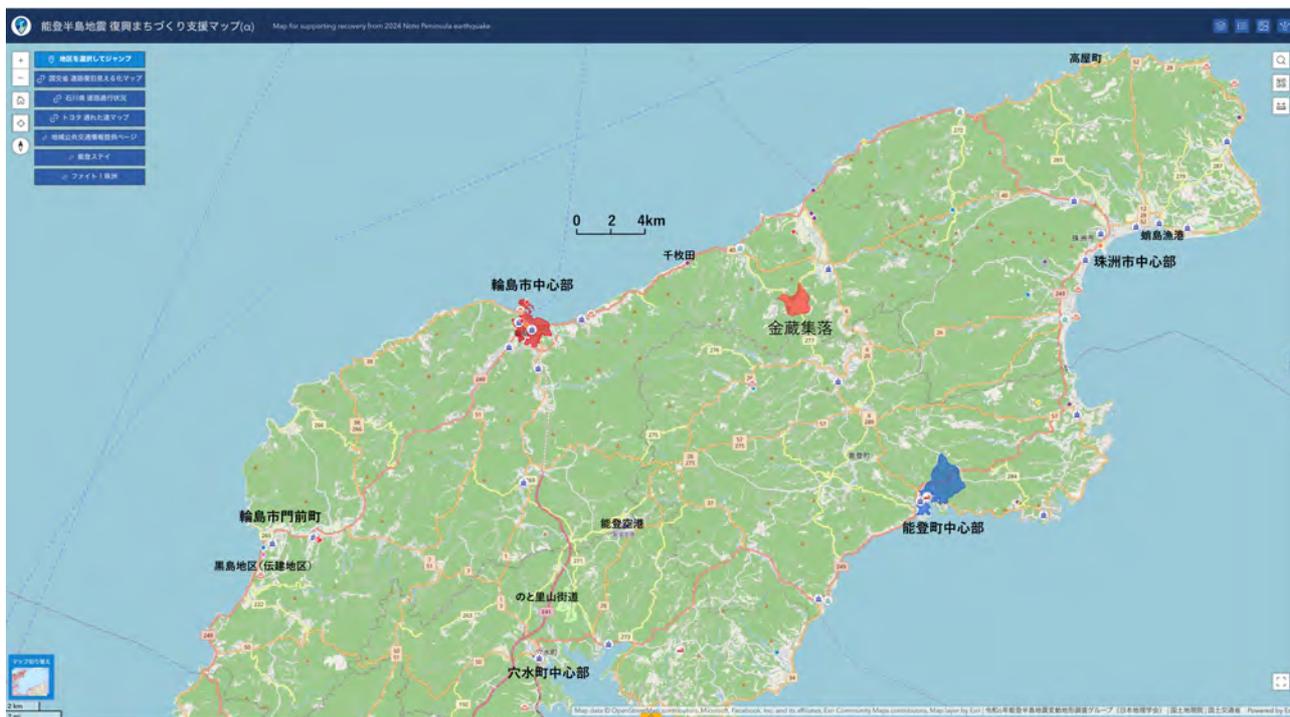
- ・ 本震：2024/1/1, 16:10 頃, M7.6, 震源：珠洲市内, 最大震度七
- ・ 地震被害特性：強い揺れ, 外浦での地盤隆起, 内浦での津波, 液状化, 斜面崩落, 延焼火災
- ・ 能登半島地域の地域社会特性：過疎化, 高齢化, 輪島塗に代表される伝統産業, 豊かな観光資源とおもてなしのこころ, 輪島朝市, 和倉温泉.
- ・ 豊かな自然・風景資源：2011 年世界農業遺産 (里山・里海), 浄土思想,
- ・ 厳しい公的避難所環境：cf. 床で寝起き 1 カ月 「30 年前と同水準」 能登の避難所、改善策あるか (朝日新聞デジタル 2024/6/26)

<https://digital.asahi.com/articles/ASS6T3QV2S6TPTIL014M.html>

(2) 輪島市金蔵集落

1) 輪島市金蔵集落

※以下の記述は、7/29 の集落訪問と井池 (いのいけ) 区長へのインタビューと市資料を元としています。



a) 地域と被害状況

- ・ 発災時の人口：95 人(30 代 2 人，小学生 1 人)，世帯数 54 世帯，平均年齢 75 歳。
- ・ 集落には川がないので，水の確保が昔から 1 番の関心事。今回の震災で「水」の大切さを再認識した。
- ・ 水田が 36ha あるが，昨年耕作されたのは 20ha（13 軒で耕作）である。震災によって，溜池と水路が被害を受けて使えないので，今年はさらに少なく，1 ha（2 軒で耕作）である。水路については，市に復旧を依頼しているが，復旧が必要な水路が金蔵地区だけでも 100 ヶ所以上あり，全てを同時には復旧できないので，実際に今年田植えに使う水田までの水路を先行して修繕してもらうことになった。
- ・ 農業用水として集落が管理している溜池は 11 か所。溜池の造成には億単位で費用がかかり，修繕が必要なものもあり，これが集落の最重要課題となっている。
- ・ 溜池の維持管理には多額の費用がかかるので，集落の伝統である「総掛かり」という制度によりを管理してきた。これは，溜池の管理費を農業の従事者だけでなく，全世帯で平等に負担する制度である。以前は当たり前のこととして受け入れられていたが，この制度に対して不平不満の声が上がるようになったので，金蔵集落の規約に記載することとなった。

b) 避難生活の状況

- ・ 住家の全壊被害は数戸程度（詳細未確定）。一方で 44 世帯（全半壊世帯）。地震があった後すぐに集会所を避難所に指定したところ，帰省者含めて 103 名集まった。自宅敷地にテントを張った者もいた。
- ・ 食料は全て持ち寄り。米，野菜は十分あったが，水道と電気は使えず。4 日目ようやく給水が来た。
- ・ 金蔵に通ずる主要な道路と水道は復旧に 2 年かかると言われた。
- ・ 他の集落（南志見集落）では 1 名行方不明者が出ており，今でも消防隊により検索を継続している。
- ・ 雪が降ると，1 日で車のボンネットくらいの高さまで積もり，除雪車による除雪ができなくなるので，集落内の全ての除雪機を集会所に集めた。また，倒木による家屋の被害が発生する恐れがあったので，チェーンソーも一緒に集めた。
- ・ ガソリンや灯油，食料品（食材）は自衛隊から支給されるようになったので，集落から支援物資の給付場所まで定期的に取りに行った。
- ・ 食事は，自衛隊から給付された食材を使って集落内で調理した。
- ・ 1 月 4 日から 3 月末まで，集会所に全住民が集まって以下のような役割分担を行った。（4 月以降は 1 週間に 1 回集まっている。）
 - ① 通院者を病院まで連れていく人
 - ② 薬を取りに行く人
 - ③ 物資を取りに行く人
 - ④ 除雪をする人

c) 仮住まいについて

- ・ 集落内での仮設住宅の建設を求めて輪島市と協議（3/4 には要望書提出）するも，集落外に建設。
- ・ 2 年間水道が使えないという話だったので，当初は 53 世帯中 44 世帯が仮設住宅の入居を申し込んだ。その後，3 月中旬までに水道が部分復旧したので，仮設住宅の申込みが 21 世帯まで減った。そして，現在，17 世帯が仮設住宅で生活している。
- ・ 仮設住宅での生活により，所属する自治組織が①仮設住宅内での自治組織，②仮設住宅が建つ地域の自治組織，③被災前の金蔵という自治組織，と増える。集落の一体感を保つために，情報伝達（回覧板の回付など）は③でいこうということになった。
- ・ 災害公営住宅の入居希望者は 10 世帯ほど。令和 7 年頃から建設に向けた計画がスタートする予定で，設計について研究者や建築家の方達と協議している。

d) 集落復興に向けて：寺（仏教）と水稲耕作

- ・金蔵集落には、正願寺、正楽寺、慶願寺、圓徳寺、金蔵寺の寺が5か所（1か所は廃寺）浄土真宗の宗祖である親鸞の命日（11/28）にちなんで、毎月28日には、寺に集まり、お参りを兼ねて食事をとっていた。食事は当番制で5,6人が1グループとなり、30食分作っている。メニューは小豆の味噌汁、煮しめ、酢の物、ごはん、と決まっている。食事の準備の際は、誰が何を準備するか、あらかじめ決まっておき、これが、集会所での避難生活にも活かされていた。
- ・蓮如（室町時代の浄土真宗の僧）がやったことと同じことをすれば、震災があっても乗り越えられると感じる。
 - ①手紙を書く。→1人1人を忘れていないと伝える。
 - ②講を組織する。→寺に人を集める。（=寺に来れば食事がある。）
- ・また、今回の震災では集会所に住民が集まったが、本当は寺に集まるべきであると思っている。
- ・金蔵の稲作では、水の采配を池係（溜池の管理が任務）の人間が行う。水のやり方次第（池係の人次第）で、米の良し悪しが決まる。また、稲作の水は雪解け水を使うため、雪も米作りの重要な要素である。さらに、美味しい米作りには、暗い場所、かつ、冷たい水、が重要な要素と言われている。

子どもが野球をしている。練習場所がなく、(復興に)数年もかかるのであれば転校などを考えてしまう
輪島市 女性44歳 調理員



金蔵集会所で集落の住民と話し合いをする区長の井池光信さん(左) 11月3月20日、石川県輪島市町野町、上田潤彰



浜木香織さん

ふるさと残したい

70人戻れる環境作りに奔走

能登半島地震の後、暮らしてきた集落に残る人はいれば、復旧の遅れなどから、戻れないと考える人もいる。暮らしの再建や地域の存続を求め、それぞれが悩んでいる。輪島市町野町の金蔵地区は、95人いた住民が能登半島地震後に5人に減った。区長の井池光信さん(88)は、困りごとを話し合える朝の会を開いたり、集落への仮設住宅の建設を求める要望書を出したりして集落の外で避難中の70人が戻ってきやすい環境づくりに走り回っている。

金沢市から車で北へ3時間半。ガタガタになった急勾配の道を進むと、棚田が広がる金蔵地区にたどり着く。

元日の微塵で、全戸で停電、断水した。住民らが続々と自主避難所の集会所に集まった。自衛隊がへりて物資を運んでくれるまでの4日間、正月の食材を住民で分け合っていた。

電気と水道の復旧が見通せなかったため、多くの住民がそれぞれの判断で、医療関係者が常駐する県南部の避難所などに次々と避難していった。

自宅が半壊した井池さんは、妻の由起子さん(88)と集会所での寝泊まりを続けてきた。

1月下旬、金蔵地区内の住民は井池さん夫妻を含め、30〜70代の10人くらいいまで減った。

静まり返った集落で話題になったのは、「みんな戻ってきてくれるだろうか」だった。

井池さんが震災後に提案したのは毎朝の会合だ。午前8時半に集会所で。午前8時半に集会所で。午前8時半に集会所で。午前8時半に集会所で。

3月20日の朝には12人が集まった。いつもにきやかな会合が、井池さんの一言で静まり返った。「まだ、市からの回答が来とらんよ」。井池さんが報告したのは、仮設住宅の建設についてだった。集落の中に建ててもらおうと、3月4日に要望書を市長あてに提出した。返事をみんなが待ち続けている。

「子どもたちの進路や頼っていた家の状態を考えると、いますぐ地元に戻れるか」と聞かれても、今は悩んでいるとしか言えないんです」

輪島市の浜木香織さん(41)はそう言って肩を落とした。

地震で自宅は「準半壊」と判定された。廊下にボールを置くかと転がるほど「明らかに傾いている」。自宅に戻るのが怖くて、2月中旬、夫や子どもら6人で金沢市内にあるみ

集落での建設を求める理由について、次のような趣旨で記した。「コミュニティ維持による生活の質の確保を図りながら人口流出を防ぎたい」とはいえ、インフラの復旧の遅れや高齢化などを理由に集落に戻れないと考える人もいます。県南で避難している高齢の女性は「自宅にいつ水が通るのかもわからないの

なし仮設のアパートに移り住んだ。ただ、収入面での不安が募る。2月末には、経営していたアクセサリーや家具などを扱う雑貨店兼工房の閉鎖を決めた。昨年5月に開いたばかりだった「念願かた」がオープンしたお店だったのが本当に残念。ため息しか出ません」

いまは、輪島市内の企業が金沢市内で操業している漁船に乗る漁師の夫、寿之さん(41)の収入が頼りだ。自宅の修理費

「毎日が正解のわからない選択の連続。ずっと不安続きですが、それでも家族のために前に進んでいくしかないです」

(岡野大郎)

店閉鎖「正解わからない」

に加えて、大学進学を控えた長女の学費、転校した次女と長男の学用品の購入など、今後多くの出費が予想される。

新年度から中学3年生になる三女は「ずっと一緒だった友だちと卒業した」と、輪島市で学校生活を送ることを望む。

断水が解消した祖父母宅から通う予定だが、なかなか復旧が進まない地元へ送り出すのは親として心配で寂しい。ただ、本人の希望を最優先した。

「毎日正解のわからない選択の連続。ずっと不安続きですが、それでも家族のために前に進んでいくしかないです」

(岡野大郎)

(3)「また、つくりたい」／輪島塗の生命力（輪島塗塗師の赤木明登さん）

- ・「心が壊れていく、破壊された輪島のまちを見ていると」「ぶっ壊れているが、また、つくりたい」（5/15 東大セミナー）
- ・「僕が追いかけつづけてきた器に宿るべき生命の秘密である。そしてその源流には、土があり、さらにそのおもとには、自然がある。自然の向こうには、死者たちの住む浄土がある」（工藝とは何か、p.160）

<https://www.youtube.com/watch?v=P8ftTf51FWg>

(4)現在の仮説：能登半島地震からの復興とは、「豊かさ」の回復である。

- ・「豊かさ」とは、貨幣的価値を含むが、それだけに留まらない、人々および地域環境の交互作用（自然と人間社会の物質代謝）によって育まれる価値（cf.暉峻淑子, ジョン・ペラーミ・フォスター, 斎藤幸平）
- ・里山・里海の「暮らしの循環社会」を根拠地とした能登町震災復興計画
- ・PAL System さんの理念「心豊かなくらしと共生の社会を創ります」

(5)「命じる技術」と「聞く技術」で構想する復興まちづくり計画へ：近代復興モデルの先へ

- ・赤木明登さんの問いかけ：「命じる技術」と「聞く技術」
「ぼくはいま、いにしへの切実な信仰心を否定することなく、また、近代合理主義の恩恵をも否定することなく、両者の上にたつ第三の道がありえるのではないかと考えている。それを先駆けて担うのが、工藝にこそ課せられた仕事なのではないだろうか」（工藝とは何か、p.189）
- ・「命じる技術」としての帝都復興事業＝近代復興：「蚯蚓道路と寄木細工の敷地を撤廃して秩序整然たる道路と宅地をつくる」（1924年 内務省復興局パンフレット）

Ref.市古太郎（2023）帝都復興:近代都市への復興提案と深まった都市計画への関心，都市計画 363号，p.7

- ・「聞く技術」の提案者とも言える宮澤賢治『注文の多い料理店』に所収される「狼森と筑森，盗森」

https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/1926_17904.html

3.自然災害からの「くらしの回復」に備えるとは？

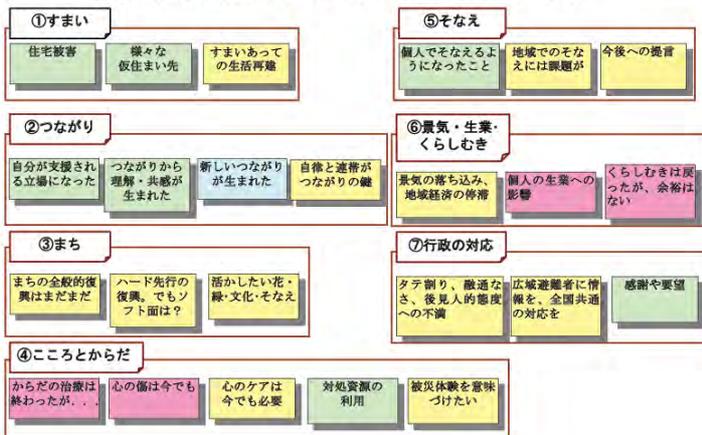
(1)生活復興感指標と復興カレンダー

- ・生活復興感：「自分はもはや被災者ではない」と思える程度を、「生活の充実度」（震災前と比べて、毎日の生活が明るくなったと感じているか）・「生活の満足度」（くらしや健康などにどれくらい満足しているか）・「1年後の生活の見通し」（1年後の生活が今より良くなっていると思うか）の3つの回答を総合した指標。
- ・生活復興感は、以下の「生活復興7要素」で構成されている。①すまい，②つながり，③まち，④そなえ，⑤こころとからだ，⑥くらしむぎ，⑦行政とのかかわり。7要素の抽出作業は1999年の神戸市草の根復興検証ワークショップの成果。
- ・生活（くらし）を中心としつつ，地域活動，地域産業も含めた「時間が経過していくとともに生活が復興していくようす」を被災者意識から捉える手法が「復旧復興カレンダー」。

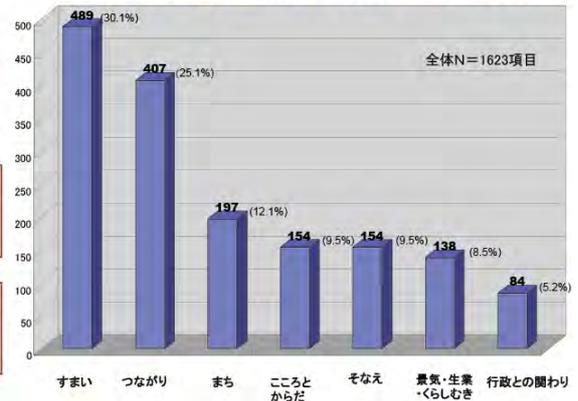
Ref.木村玲欧ら：10年を超える生活再建過程における被災者の現状と課題－阪神・淡路大震災から16年間で振り返る復興調査結果－，地域安全学会論文集 No.17, pp.35-45,2015

市民の生活再建実感

(神戸市草の根検証ワークショップ結果、99年7月～9月)



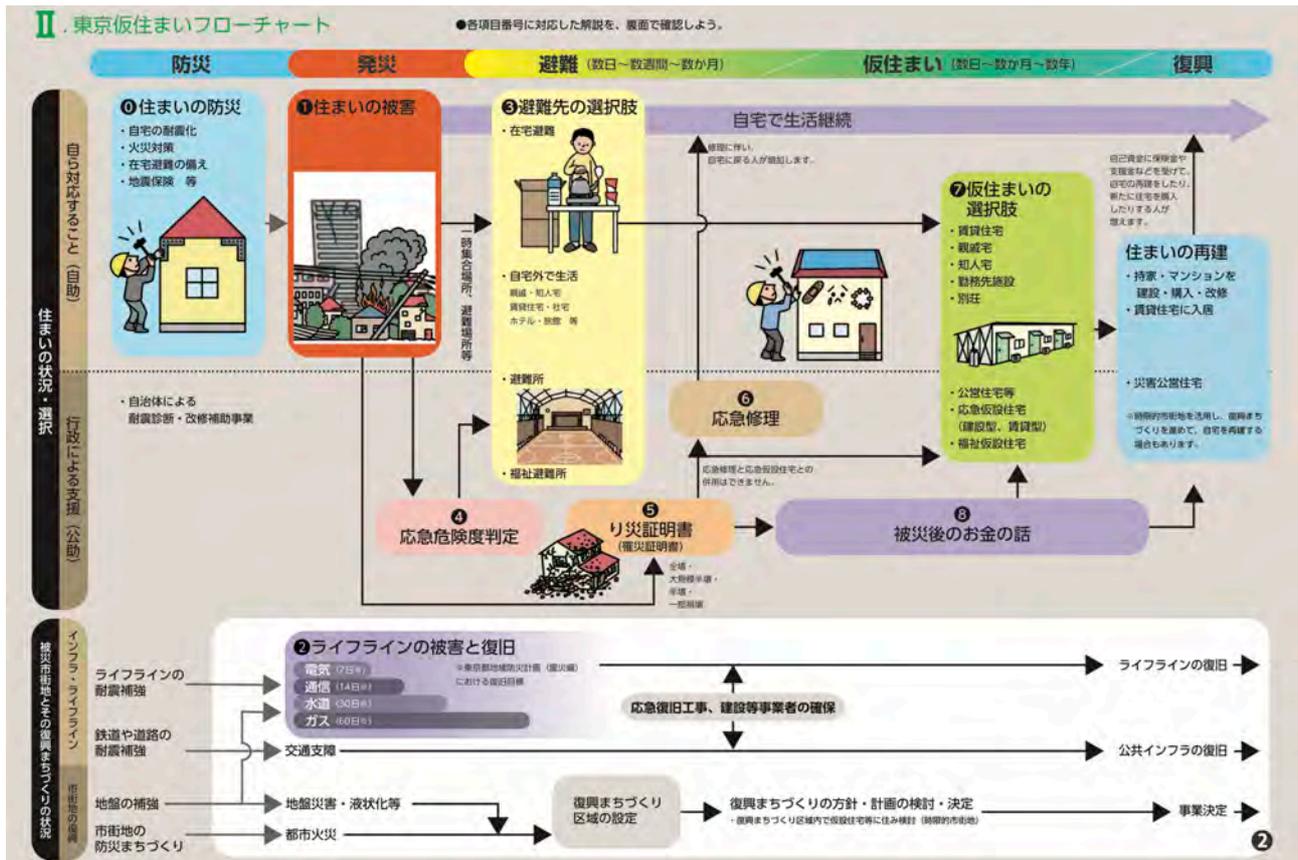
生活再建構造の分野別カード枚数



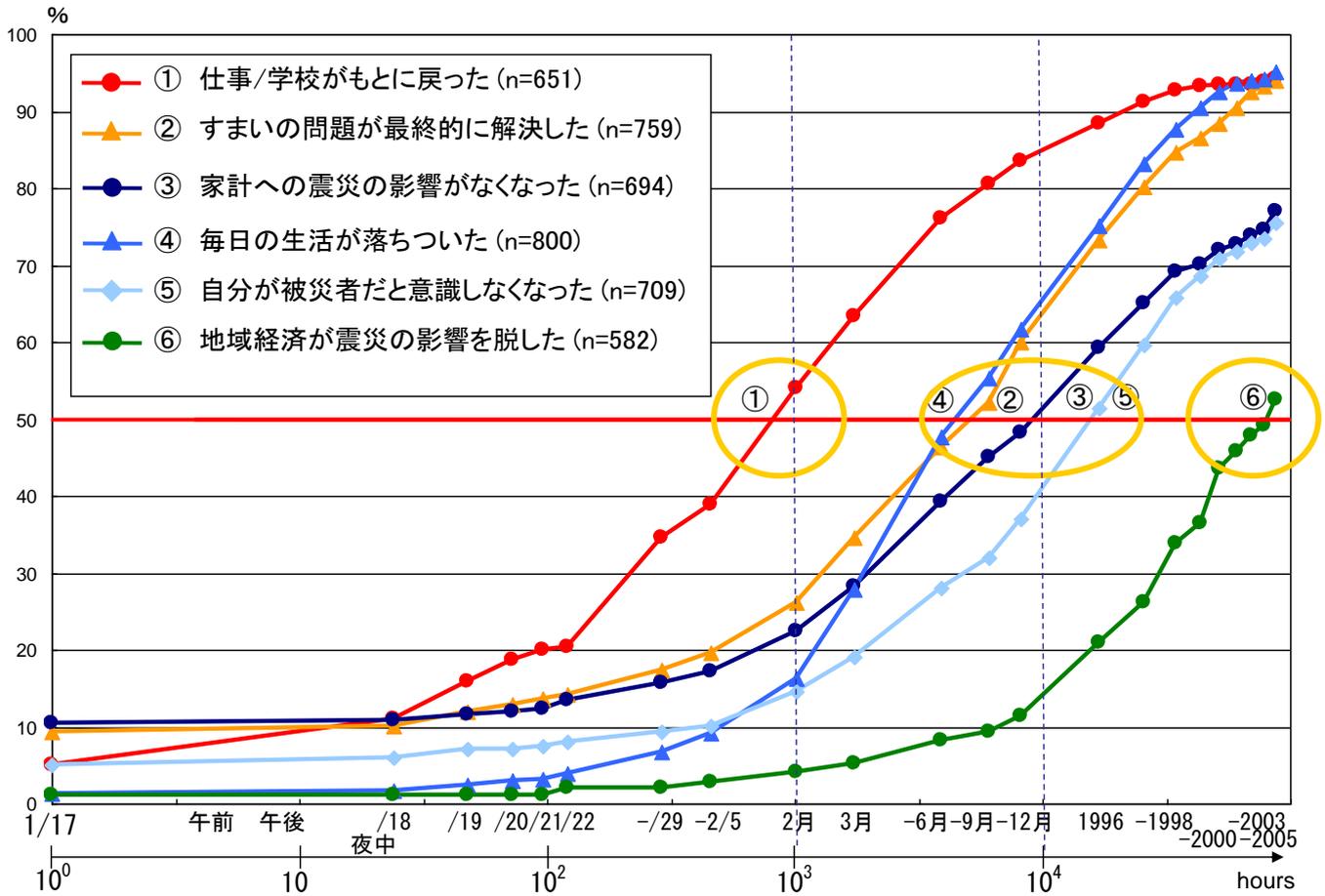
Ref.立木茂雄, 林春男, 矢守克也, 野田隆, 田村圭子, 木村玲欧 (2004) 阪神・淡路大震災被災者の長期的な生活復興過程のモデル化とその検証, 地域安全学会論文集, 第6巻, p. 251-260

(2)自然災害からの「くらしの回復」に備えるとは?

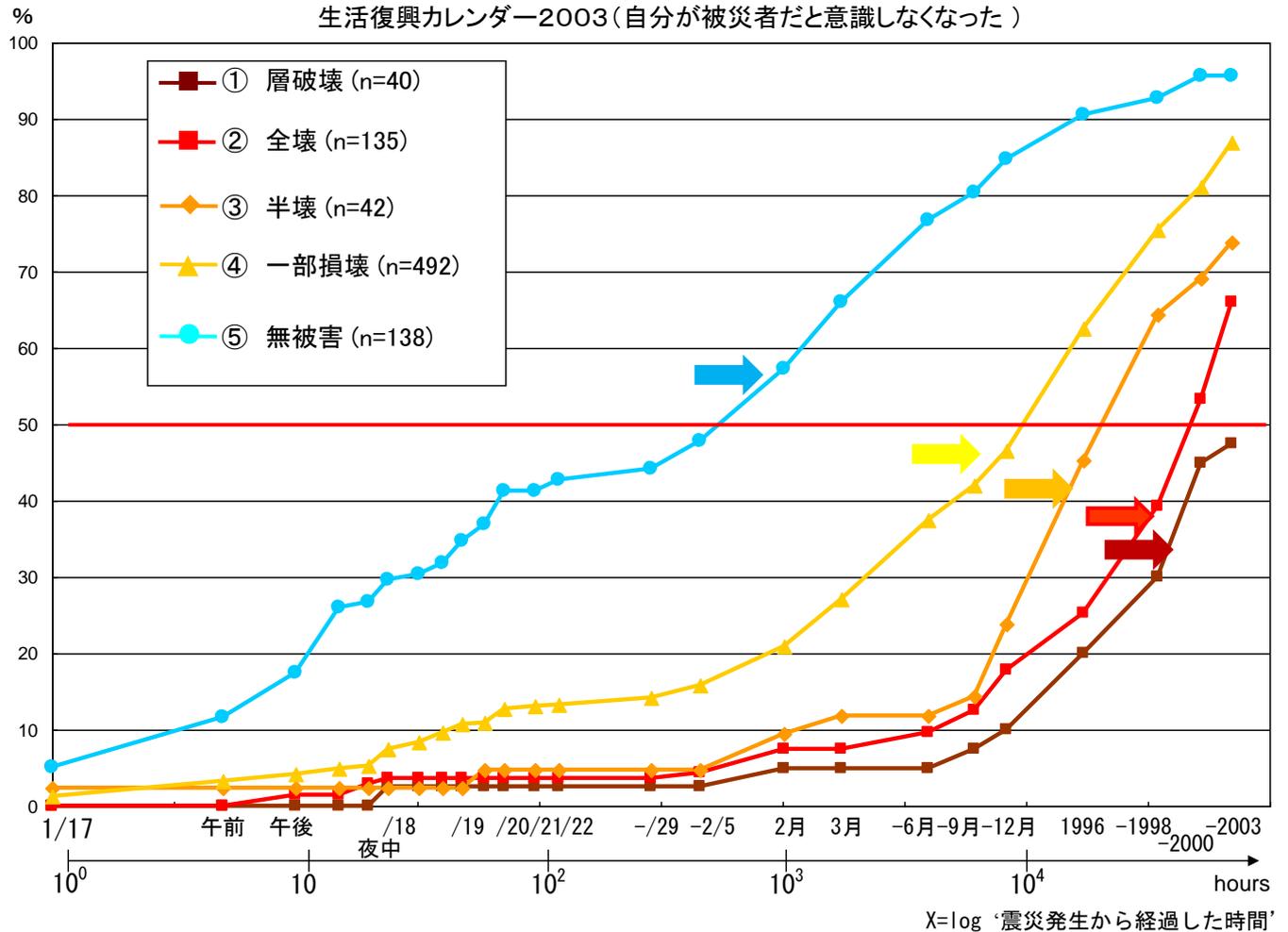
1) 「すまい」に大きく左右される (東京都住宅政策本部：東京仮住まい)



- 2) 避難生活環境：衛生・食事・用便・就寝・他者
- 3) 首都直下地震においても多くの世帯が避けられない「在宅避難生活」(在宅生活支障問題)
- 4) 不確実性の大きさ → リスク・コミュニケーション方式の意義



生活復興カレンダー2003(自分が被災者だと意識しなくなった)



4.地域として「くらしの回復」に備える事例：都立大都市防災研究室のアクションリサーチから

※東京での多様な（企業や福祉施設とも連携した）地域防災活動については、東京消防庁「地域の防火防災功労賞」や東京都「防災隣組」（現在、新規認定は休止中）といった事例集があります。研究室として協力させていただいた地域の防災の取組みから、「くらしの回復」への取組みを考えてみたいと思います。

事例1：【八王子市絹ヶ丘一丁目】土砂災害警戒区域かつ風景資源としての開発残存斜面緑地

※八王子市都市計画課の「防災まちづくり」への働きかけへの参加協力

Keyword: 土砂災害警戒区域との共生、開発設置街区公園の活用、地域サロン活動と地域防災活動、

(1)まちの形成経緯と特性

- ・1970年代に多摩丘陵を大規模造成し、開発分譲された戸建て住宅地
- ・駅徒歩圏の住宅地。今後、中古住宅・売り宅地がまとまって市場に出る可能性がある。
- ・谷埋め盛土、急傾斜地と隣接している住宅地もある。
- ・住宅地境界が急傾斜地上に位置し、2016年に土砂災害特別警戒区域に指定。つまり入居世帯の多くは住み始めから約30年が経過する中、土砂災害リスクと隣合わせになっていることが公に示された
- ・斜面土地被覆は緑地となっており、八王子盆地を一望できる風景資源。
- ・初期分譲入居世代（主として夫が70代）が子育て・現役リタイアを経て、地域自治活動はとても活発。

(2)地域自治会による活発な地域活動と地域防災の取組み

※絹ヶ丘一丁目自治会の地域活動

- ・自治会として：①ごみ、空画地、空き家問題、②健康対策・高齢者対策、③防犯・交通安全、④防災：自治会として自主防災組織（3名の担当理事）
- ・主な自治会行事：夏まつり(8月)／芸能祭(10月)／文化祭(12月)／映画祭(年3回)／餅つき大会(1月)

※絹ヶ丘一丁目自治会と連携した地域住民活動

- ・ふれあいネットワーク（家事お手伝いボランティア）
- ・子ども会活動
- ・ふれあい喫茶ポラーノ（住民の自宅を会場に）、フレンド（老人クラブ）

※絹ヶ丘一丁目自治会の体制

- ・理事会：12名（任期10年）、9の区、45の班（区長、班長は毎年交代）

※長年にわたっての地域防災活動

- ・年1回の長沼地域としての長沼小学校での地域防災訓練とは別に、自治会としての防災訓練（近年は10月に安否確認訓練）
- ・安否確認訓練は、各世帯が門扉のところに「タオル（白が多い）」を無事ですという意味で結び、45の各班で確認し、地区内の3つの街区公園に設置する記入ボードに記入。その後、自治会館に集約。参加率は86.1%
- ・自治会館において、炊き出し訓練、宿泊訓練も実施経緯あり。

(3)土砂災害リスクへの対応と在宅避難生活を考える適応型防災ワークショップ

- ・2019年度に八王子市が発意提案し、適応型防災ワークショップを実施。
- ・開発入居から約30年経過した2016年の土砂災害警戒区域指定。地域として土砂災害リスクに対するリスクコミュニケーションは可能か？地域主体の対応アイデアは想起できるか？
- ・がけ地（土砂災害警戒区域）に正面から向き合うものに、それを可能としたのは、自治会での地域サロンや文化サークル活動といった楽しめる地域活動、防災・防犯の取り組みで培われてきた住民間の信頼関係があったからこそ。
- ・リスク・コミュニケーションが生まれ、斜面竹林の管理やがけ天端部の非建築化など、適応（Adaptation）の視点からの斜面防災のアイデア出しがなされた。

Ref.市古太郎（2021）郊外丘陵住宅地を対象とした土砂災害リスク適応型防災ワークショップに関する研究
- 八王子市 K 地区でのケーススタディ -, 地域安全学会論文集 No.39, pp.299-308

事例2：【八王子市上柚木】知的刺激を継続する改善管理型の防災ワークショップ

※都市防災研究室として2014年からコラボ中

Keyword: 東日本大震災, 青少年育成の地域組織, 学校地域自主運営, PTA とボランティア活動, 父親の参加, コミュニケーション防災の重視

(1)まちの形成経緯と特性

- ・多摩ニュータウン内（最寄り駅は南大沢）／集合住宅世帯が多い。
- ・自治町会が未組織の地区もある。集合住宅管理組合が自主防災組織の主単位
- ・東日本大震災まで、地域としての防災活動は特になし、から、子育て中のママ・パパを中心的な担い手とした地域防災活動へ。

<https://www.youtube.com/watch?v=xexAb8gsYuk>

(2)東日本大震災以降の系譜：コロナ禍でも工夫して「ゾーン方式」で訓練実施

- ・3/11 当日：20%の世帯で当日帰宅できない家族あり（都市防災・災害復興研究室推計値）
- ・中学校 PTA が母体となり、支援物資を集め、福島へ持って行く。
- ・地域としての防災訓練を3小中学校 PTA が発意
- ・青少対（青少年対策地区委員会）の取り組みとして実施へ。
- ・2011/10月：第1回上柚木地区地域防災訓練
- ・2012/10月：第2回上柚木地区地域防災訓練
- ・2013/10月：第3回上柚木地区地域防災訓練
→（15種類の実技訓練）①初期消火訓練、②バケツリレー（児童館主催）、③車イス避難体験（社会福祉協会主催）、④無線通報訓練、⑤ロープ結索訓練、⑥煙ハウス体験、⑦AEDと包帯法、⑧防災倉庫見学、⑨簡易間仕切り体験、⑩警察車両展示、⑪はしご車展示、⑫防火衣体験、⑬D級ポンプ訓練、⑭倒壊家屋からの救助訓練、⑮起震車訓練、
- ・2014/05月：都立大とのKick Off会議
- ・2014/10月：上柚木防災グループトーク（第4回上柚木地区地域防災訓練）
- ・2015/10月：子ども防災プログラム並行型防災グループトーク（第5回）
- ・2016/10月：子ども防災プログラム並行型防災グループトーク（サブプログラムの充実化）（第6回）
- ・2017/10月：お父さん朝練 Project 並行型防災グループトーク（第7回）
- ・2018/10月：お父さん朝練 Project+ 災害時の避難所・子どもを支える場としての学校（第8回）
- ・2019/10月：上柚木防災クロスロード＋重ね地形図ワークショップ（第9回）
- ・2020/10月：コロナ禍でも「コーナー」でなく「ゾーン」方式でワークショップ実施（第10回）
- ・2021/10月：簡易版ワークショップを実施（第11回）

- ・2022/10月：防災ワークショップ + 中学校との合同開催（第12回）
 - ・2023/10月：防災ワークショップ（コミュニティスクールの取組みとの連携）（第13回）
 - ・2024/10月：防災ワークショップ（コミュニティスクールの取組みとの連携）（第14回）
- ※各年度とも、10月の防災ワークショップに向けて、3回ほど、地域 + 大学で企画会議と反省会を開催。

(3) 青少年育成の地域組織が担う地域防災の取組みとそのインパクト

- ・自治町会がない地域であり、地域における大事な関係づくりの場である青少年育成の地域組織（東京の多摩地域では、おおよそ中学校区程度）。
- ・学校運営協議会制度：防災に限らず多様な地域提案学校活動
- ・多摩ニュータウンらしい隣人関係ゆえのハードルと可能性
- ・在宅避難生活、言い換えれば「生活回復・生活継続」の視点からの事前復興まちづくり

5. 「くらしの回復に備える」取組みに向けて（生活協同組合の立場から!?)

(1) 「安心して心豊かな食を地域に」 PAL System さんのテーマの視点から被災地の生産者と連携する

- ・岩手県重茂漁協と生活クラブ生協岩手の連携（cf. 社会運動 2014 年, no.414）。

(2) 地域サロン活動のような(!?) 日常的な組合員活動は災害時にも大変有効。

- ・サロン活動：在宅避難生活期の支え合い活動に（能登半島地域でも）。
- ・地域福祉活動との接点。

(3) 地元大学や地域で活動する NPO/NGO 等とも連携して。

- ・被災地において、災害ボランティアの活動コーディネート、支援活動を行う地元社会福祉協議会および NPO/NGO 等の貢献は大変に大きい。ぜひ事前からのつながりづくりを。

6. 参考文献

- 1) 能登半島地震復興まちづくり支援マップ
<https://experience.arcgis.com/experience/51386339746f41ce8282620efdb38450/>
- 2) 市古太郎（2024）被災地サロン活動と復興まちづくりの連携の可能性 - 能登半島地震での活動参加も踏まえて -, 建築学会都市計画部門研究協議会「能登半島地震復興」, pp.42-45
- 3) 市古太郎（2023）地域復興協議会：くらし・なりわい・すまい・まちの回復, 災害復興事典, 朝倉書店, pp.138-141
- 4) 建設通信新聞 2024/8/30 号「しなやかに, すみやかに回復するコミュニティを」
- 5) 市古太郎（2024）Disaster Research と Regenerative, 都市計画 372 号, pp.71-74
- 6) 市古太郎（2022）小田実さんの市民運動論および草野賢一さんの市民社会論と東京憲章, ネットワーク 2022 年 12 月号, 東京ボランティア・市民活動センター, 381 号, pp.21-22

※上記の 2) から 6) は市古の研究ホームページで PDF 提供しています。

3-2 能登町の暮らしの循環

「里山里海」がもたらす豊かな恵みを起源として、歴史の中で紡がれた「暮らし」「生業」「祭り」に繋がる「暮らしの循環」が、さらに新たな恵み、知恵、感謝、人を呼び込み、廻ることによって、持続的な暮らしが営まれてきました。

今回の震災によってつながりが弱くなってしまったこの暮らしの循環を修復することが、人々の幸せを取り戻すことになります。



豊かな自然の恵みを享受し、人の暮らしの営みにより形成された「里山里海」。能登で暮らす人々の生活に深く息づいています。

恵み



里山里海の恵みによって育まれた農林漁業、守り受け継いできた祭りや伝統文化に囲まれた暮らしがあります。



自然の恵みへの感謝の気持ちや神への信仰心が篤く、各集落で行われている祭りや民俗風習があり、人々のアイデンティティとなっています。

祭り

感謝



暮らしのなかの知恵の蓄積により伝統技術を培ってきた農林漁業があり、四季折々の豊かな農林水産物がつくりだされています。

生業

知恵

里山
里海

暮らし

500 250 0 500 m

